

◎響きあう詩人の魂

東直子

もう10年以上前のことだと思う。詩の朗読イベントで、詩人の吉増剛造さんが朗読をする姿を見て、心の奥が震えた。床にくぎを打ち、その音が反響する中で発せられる言葉の響きが、新しい言葉を連れてくる。言葉を発することの原点に立ち返るようなパフォーマンズだった。

その吉増さんを撮った新しいドキュメンタリー映画「眩暈 VER TI GO」が完成した。12月13日から東京都写真美術館ホールで上映される予定である。先日、監督の井上春生さんに案内され、試写会で見た。

2019年1月に亡くなった前衛映画作家で詩人のジョナス・メカス氏の一周忌に合わせた追悼の旅の記録である。2人は長年親交があった。吉増さんが大きなフィルムに焼き付けたメカス氏の写真を、川ぞいで光に透かすところから映画は始まる。吉増さんは、メカス氏の魂に話しかける。話しかけながら新しい詩が生まれる。詩の生まれ

る現場を映したドキュメンタリーであり、叙情詩でもあるのだ。

メカス氏のニューヨークの仕事場兼住居を訪ね、忘れ形見である息子さんに会う。実験的な映画を作り、また、その文化を守ってきたメカス氏の業績と最後の時間を想いあう。

ほの暗い部屋の中で、糊で貼り合わせた紙に、吉増さんの想いのこもった詩が書きつけられている。そのとき「完成させようなんて思っていないんだよ」と吉増さんがぼそりと語った言葉が忘れられない。

映画の中で「メカスの難民日記」（飯村昭子さんの訳、みずず書房）が読み上げられる。その時代の人々や風景が生き生きとよみがえる美しいテキストだった。（歌人・作家）

（了）

【編注】 ひがし・なおこ